



移住支援担当
松藤 裕也

3年間の取り組みを教えてください。

まずは、「移住支援担当」として移住希望者に対して、面談やアドバイスをこなしてきました。先輩移住者として、相談者に寄り添った視点でのアドバイスを中心にやってきました。

また、スケジュールが許せば、季節ごとの町のイベントのお手伝いも積極的にしてきました。

その一方「フリーミッション」としては、採用面接の時からお話をさせていただいた計画である「皆野町にキャンプ施設を作る」ことを活動として町に認めていただき、3年間の活動期間内に開業を目指す約束で活動をしてまいりました。土地の選定から始まり、地元での説明会、インフラの整備など、大変なことがいくつもあり、途中何度も「もう無理だ」と思いました。しかし、幸運なことに、関係する地元三沢のかたや隣接する「近所のかたに」ご理解をいただき、役場の皆さんの熱心な協力にも助けられ、昨年11月1日、何とか

開業にたどり着きました。



移住相談センターにて

「今だから言える、大変だったことはなんですか？」

キャンプ施設「僕らのミナノベース」計画が動き出した当初は、とにかく前途多難の様相でした。まだ僕自身に信頼が全くなかったこともあり、思いもよらぬ言葉を投げかけられることもあり、一時は全く自信を喪失し思い悩んだ時期もありました。しかしそんな中でも明るく優しく励ましていただいた近所のかた、移住当初から相談に乗ってくださっていた地元のかた、現場担当者のかたなどの協力に支えられ、何とか開業することができました。



作業を手伝ってくれた皆さんと

「活動を終えて思うことはありますか？」

総務省の制度である「地域おこし協力隊」。僕はこの名前になんとなく違和感を持っていました。なんだかちよつと上から目線な名前に思えるからです。僕の場合は、僕がこの町でやりたいたことがあって、周りの人に協力をしてもらいながらなんとか実現してきたので、「過疎化した地域に移住してその地を活性化していくことに協力しています」なんて思えません。むしろ、「ぼくらのミナノベース」という計画実現のために、ご近所・地区の皆さん・行政に協力をいた



カフェメニューの試作中

だきながらやってこれたと思っています。結果的に、もし僕のやっていることが何かしら皆野町の活性化・発展に寄与することができれば、これほどうれしいことはありませんし、今後は後任の協力隊員をサポートしていければ、と考えています。「地域おこし」は簡単にできるものではない、というのが今の素直な気持ちです。中には変化をのぞまないかたも当然いらっしゃると思います。今のままでいい、静かに暮らしたい、そんなあたりまえの気持ちもあるのです。そんな地元のかたのさまざまな意見・気持ちを知らったうえで、「自分はこの町で何ができるのか？」と自問し続けることが大切なのだと思っただけです。

「今後の皆野町に対して一言お願いします。」

ある時、定年退職された近所のかたとの会話で「元気の秘けつは何ですか」と訪ねると「日々一生懸命生きる」とよ」という答えが帰ってきました。僕はその答えにハッとしましたのを覚えています。都会でも田舎でも老若男女問わず「健やかに生きる」ということの本质は同じだと、あたりまえのことなのですが、それを強く感じた瞬間でした。

僕が言えることとしては、皆野町に次なる協力隊員を起用し、チャレンジャーを継続していただきたいと思っています。この町で一生懸命になつてエネルギーを使えるかたを起用していただければ、と思います。チャレンジャーには必ず失敗がありますが、それを恐れることなく一生懸命トライすることには意味があると信じています。そしてそのチャレンジャーはきつと、新たな出会いと化学反応を生み出し、この町に新しい季節を運んでくることでしょう。